

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 12 日現在

機関番号：30107

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2009～2012

課題番号：21320140

研究課題名（和文） 中世のブリテン諸島における教会組織の再検討

研究課題名（英文） Revision of Ecclesiastical Organization in Medieval British Isles

研究代表者

常見 信代 (Tsunemi Nobuyo)

北海学園大学・人文学部・教授

研究者番号：30258694

研究成果の概要（和文）：本研究は、ブリテン諸島を構成する4つの地域において、教区が確立されていない12世紀以前に平信徒への司牧がどのような教会組織によって行われたか、その実態を多角的に検証したものである。その結果、10世紀以前にはイングランドとスコットランドやアイルランド、ウェールズとの間に教会組織の顕著な相違は認められず、教会改革の過程で差異が強調されたことをあきらかにした。

研究成果の概要（英文）： This project aimed at the revision of the ecclesiastical organization for the pastoral care to the laity before the parish in British Isles. It argues that, to the contrary previous assumptions, the structures for organizing pastoral care before tenth century were basically similar in England and in Celtic-speaking Britain and Ireland. It was the muted impact of the Carolingian reforms upon the churches in Ireland, Wales, and Scotland that accentuated the differences between them and English church, and left them appearing so deviant in the eyes of eleventh- and twelfth-century reformers.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	3,100,000	930,000	4,030,000
2010年度	2,500,000	750,000	3,250,000
2011年度	2,300,000	690,000	2,990,000
2012年度	2,700,000	810,000	3,510,000
年度			
総計	10,600,000	3,180,000	13,780,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：ブリテン諸島、中世史、教会組織

## 1. 研究開始当初の背景

平成16年度から平成19年度にかけて実施した「中世ブリティッシュ・ヒストリーの射

程と可能性」(基盤研究(B)、研究代表者鶴島博和)の研究において、イングランドのキリスト教ネイション成立の核となった10世

紀以前の教会組織の検討は、課題として残された。また、その過程でネイションの存在形態に決定的な影響を与えた教会をめぐって、近年、定説に対する「修正論」が提起され、その歴史が大きく書きかえられつつあることがあきらかになった。本研究は、このような研究経過を踏まえ、ポスト・ローマ期からラテン的キリスト教世界が確立する 11 世紀から 12 世紀の「グレゴリウス改革」までの時期を対象にブリテン諸島の教会組織について見直しを行ったものである。

## 2. 研究の目的

中世初期のブリテン諸島の教会組織について、従来の定説ではイングランドについては「司教制度」(司教区)を基盤とした司牧活動が想定され、アイルランドについては観想的修道生活の特徴とする「修道院制度」が想定されてきた。さらにウェールズやスコットランドについても同じ「ケルト世界」としてアイルランドとの密接な類似性を期待し、「ケルト教会」(Celtic Church)なる概念が創出され、適用されることになった。この結果、ポスト・ローマ期以後の教会組織は、イングランドとそれ以外の地域との違いが強調され、'episcopal'であるか' monastic'であるかが争点とされた。しかし、この定説は、12、13 世紀に確認される教会組織およびそこを基盤とした宗教活動のイメージを中世初期に投影したものであり、また中世初期の史料に出てくる' monasterium'をベネディクト会的意味の含まれた' monastery'という現代語に翻訳した点で批判を受けている。

本研究では、このような研究史を踏まえてブリテン諸島の4つの地域のそれぞれについて、その実態を明らかにすべく文献史料や考古学、地名学など隣接分野の検証を行った。その結果、残存史料のほとんどが聖人伝や系図史料であるアイルランドとアングロ・サクソン末期に1,000を超すチャーターが残存するイングランド、ほとんど史料が残存しないスコットランド、ウェールズとを単純に比較することはできないが、これらの4つの地域で差異が顕在化するの、11世紀末からの教会改革の過程であり、既に改革に着手してい

たイングランドの歴史家や教会人によるケルト語圏の教会改革の遅れに対する批判・非難が所謂「イングランド教会」対「ケルト教会」という図式の成立に貢献したとの見通しを得た。

## 3. 研究の方法

研究拠点を北海学園大学に置き、研究組織メンバーと密接な連携のもとで、それぞれ個別に分担研究を進め、年間2~3回程度の研究会を開催してそれぞれの研究成果を検討し合い、全体として有機的関連のある研究になるように調整をはかった。

さらに、本研究は我が国ではほとんど研究実績のないテーマであり、各分担に関する史料・文献の収集のために、2009年度に連合王国やアイルランドにそれぞれ赴き、2010年度からは毎年8月に10日から2週間の日程で、全員でイングランド、ウェールズ、スコットランド、アイルランドに出かけ、主要な教会史跡について、その立地条件や考古学調査の成果を実際に検証した。このような実地調査を通して、文献史料ではけっして得ることのできない知見を得ることができた。さらに、2010年11月にロバート・バートレット教授(セント・アンドルーズ大学)の来日を機会にお茶の水女子大学において本研究と科研費基盤研究(C)(研究代表者:新井由紀夫 お茶の水女子大学・教授)との共催で研究集会を開催し、意見交換を行った。

## 4. 研究成果

初期教会について、研究組織メンバー全員でその研究成果の一部を *Haskins Society Journal Japan Supplement 1* (2011) に公開した。さらに、教会改革の帰結を含めて共著『ブリテン諸島教会史』(創元社、2014年3月刊行予定)を公開する予定である。以下に研究組織メンバーによる研究成果の概要を報告する。

### (1) イングランドにおける初期教会

鶴島 博和

最近の研究によれば、ブリテン諸島におけるキリスト教の布教はローマ軍の撤収後に

進展した。597年のグレゴリウス一世による聖アウグスティヌスの派遣が、イングランドにおけるキリスト教布教の始まりのように言われるが、これは、ローマ司教を中心とする新たな「教皇」体制構築の一步であって、イングランドには、ローマ帝国来の教会組織が多数残存していたのである。しかし663年のウィットビーの教会会議が制度ではなく典礼を問題にしたように、7世紀の段階でイングランドに司教座管区組織が展開していたわけでない。実際の司牧は、ミンスターと呼ばれる複数の共住聖職者団からなる「母教会」を中心に行われた。この母教会が解体する中で11世紀までに小教区教会が生まれ、司教座教会—小教区教会という教区制度がイングランドに生まれた。それが修道院的教会を核とする所謂ケルト的周辺との違いというのが俗説であったが、ミンスターはモナステリウムの英語形であって、司牧と観想の集団からなる教会施設という以上の意味合いはない。これについては、大陸にもっとも近いケントの母教会であり、英仏海峡に臨む交易港でもあったラクルヴァーやミンスター＝イン＝サネットを例に検証したとおりであり、イングランドの初期の母教会は、ケルト語圏の修道院教会都市的の交易地と比肩されるような構造を有していたのである。

イングランドにおける小教区成立過程は、複雑で入り組んでいて決して単線的なものではないが、9世紀以降、北からのヴァイキングの進入を受けながらも、イングランドには徐々に強力な大陸フランク的な王権と教会が成長し、明確な司教座管区をもたない「ケルト辺境」の諸教会とイングランド教会を差別化し始めた。そして12世紀以降になると、当時の「歴史家」たちは、この差異性をことさら強調し始めた。これらはカンタベリー、ヨークというイングランド王国の二つの大司教座の帝國的拡大＝首位権主張のキャンペーンの一齣ともいえる。この側圧を受けながら「ケルト辺境」教会も、ローマ教会的な構造改革を強いられていくのである。

(2) イースト・アングリアの司教座と修道院  
森下 園

イングランド東部のイースト・アングリアについては、8世紀後半からの政治的変動やデーン人襲来などにより司教座が破壊されたことなどから、教会組織の連続性をたどりにくい状態にある。さらに先行研究でも議論が錯綜しており、とくに初期の司教座は現在のどの地であったか、研究者の間で一致をみていない。ノルマン征服をはさんで、アングロ・サクソン期の歴代司教およびノルマン征服後の司教と修道院との関係を比較考察したが、ノルマン征服前の司教と修道院の関係は修道院出身の司教もいて良好であったのに対して、ノルマン征服後は司教の管轄権が及ぶ範囲をめぐる対立が随所に見られた。

修道院については、イーリーとベリ・セント・エドマンズについて、『イーリーの書』や年代記などの文献史料に加えて最新の考古学資料などを用いて、創建から12世紀までの展開と司教との関係を検証した。その結果、前者は10世紀後半にエドガー王の保護のもと急速に所領を拡大したが、隣接するリンカン司教と修道院との間で確執がある一方で、イーリー修道院出身のイースト・アングリア司教も複数おり、両者の良好な関係が史料から読み取られた。しかし、1109年に新たな司教区が置かれた際に、イーリーに司教座がおかれ、修道院教会は司教座聖堂となり、修道院としての独立性を失うこととなった。後者は、王により特権が与えられており、また歴代修道院長は教皇などに司教座をここに置かないことや司教権限からの自由などを願いでて、ベリ・セント・エドマンズに司教座が置かれることはなかった。

このように二つの修道院と司教の関係は対照的であり、その背景には修道院と修道院教会を核とした共同体と周辺地域社会との関係の差異のあることがあきらかになった。

(3) ウェールズにおける初期教会  
梁川 洋子

キリスト教は、ローマ時代にブリテン島へもたらされた後、おおむね6-7世紀には現在のウェールズ全体に広く確立していたと考えられている。9世紀か遅くとも10世紀までには中心的な初期教会（母教会）がウェ

ールズ各地に数多く成立しており、いずれもおもに在地の聖人の崇敬と結びついていた。

こうした中世初期ウェールズの教会組織については、同じ「ケルト世界」の一部として同時代のアイルランド教会との類似が前提とされ、アイルランドに見出されるシステムをそのままウェールズに当てはめて説明する傾向が強かった。しかし、1984年のR. シャープによる批判を嚆矢として1990年代以降アイルランド教会についての訂正、再検討が進むと、従来のウェールズ教会像も見直されるようになった。とりわけ、7世紀に修道院制度への劇的転換などはなく司教が一貫して教会組織の代表として司牧の責任を負い裁治権を掌握し続けていたことが強調されるようになった。また、11世紀までに修道院あるいは母教会は世俗化して墮落したとする従来の見方も訂正され、個々の教会と密接に結びついた共同体には聖職者も俗人も含まれており、世襲で教会財産や教会内の役職を持っていたことがあきらかになっている。

さらに、従来は「修道院パルキア」論でもって説明されてきた初期教会間の関係についても訂正が進んでいる。とくに「ダヴェッドの7つの司教教会」文書は、セント・デイヴィッツを筆頭に、ダヴェッド地方の七つの教会間のヒエラルヒーを説明したものであると再評価されている。加えて、グラスベリ教会の司教からセント・デイヴィッツ司教へと転任する一種の出世ルートがあった可能性も指摘されている。地理的に遠いグラスベリとのつながりは、セント・デイヴィッツ司教管区の征服前後の変化について示唆的である。

#### (4) スコットランドにおける初期教会

常見 信代

本来のスコットランド (Scotia) の地域について、教会組織の検証を可能にするような史料が残されるのは12世紀からであり、それ以前については年代記などの断片的な記述や石碑類しかない。この不足を補うのが考古学や地名学などの研究成果であり(1)、12世紀以後の文献史料の再解釈である(2)。

①ピクトランドの初期教会：アイオナがピクトの改宗に深くかかわったことはアダムナーンの『コロンバ伝』やベータの『イングランド人の教会史』などから推測されてきたが、近年それを裏付ける教会跡の発掘が相次いだ。その一つ、ターバットのセント・コルマーン教会跡の発掘は、この地に6世紀から9世紀にかけてアイオナの強い影響を受けた、かなりの規模のキリスト教施設が存在し、周辺の礼拝堂や小教会と関係を有していたことがあきらかにされた。ターバットは、この地域の司牧をも担当したミンスターの一種だったと推測されるのである。

②史料の読み直しが進んでいるのは、「ケーリ・デー」(célidé)とよばれる聖職者集団についてである。たとえばデイヴィッド一世の治世末の12世紀中葉にスコットランドには10司教区が存在したが、その当時、セント・アンドルーズやダンケルドなど半数の司教座教会に「ケーリ・デー」の存在したことがわかっている。彼らの多くは導入された改革派修道会に吸収されたが、セント・アンドルーズでは13世紀中葉まで存続している。「ケーリ・デー」は東部や中央部の教会にも広範に存在したことが確認されている。彼らをめぐる改革派修道会との争いの記録から、彼らの教会は周辺に従属教会や礼拝堂にもち、また、ケーリ・デーのなかには妻帯者でその職を世襲している例があきらかになる。

「ケーリ・デー」は、8世紀のアイルランドに起源をもち、アイルランドでは修道院の世俗化・墮落に対する改革運動を推進した修道士の一団とみなされてきた。しかし、少なくともスコットランドにおけるその実態は、在俗聖職者の共住組織であり、平信徒への司牧を担当したミンスター(母教会)だったと解釈されるのである。

#### (5) アイルランドにおける初期教会

田付 秋子

中世アイルランドの教会組織は、初期に成立した司教制度が7世紀頃までに修道院を中心とする制度に転換したという説が長く主流であった。アイルランド特有のこの「修道院制度」の最大の特徴は、有力な修道院を中

心に地理的に広い範囲に（小王国の政治的境界を超えて）点在する修道院の連合体「修道院パルクア」とされてきたが、1980年代から様々な批判、修正を受けてきた。とくに近年イングランドで論じられている「ミンスター」との類似性を指摘する研究者もいるが、依然として「指摘」にとどまり、また、修正説に批判的ないし慎重な研究者も多く、新たな定説となる教会像は描かれていない。

このような研究状況において初期の教会組織を再検討し、その実像に迫るためには、既存研究の見直しや数少ない文献史料の精査と再解釈だけでは不十分である。これまで歴史研究に十分活用されてこなかったオガム碑文や建築、考古遺跡の最新の研究成果（とくにオカラガーンの教会建築研究が注目される）を活用することが実態の解明に有効である。文献史料に関しても、用語（「司教」「修道院長」等）の再解釈と、これらの地位にあった人物の立場や属する組織についての検討を中心に行う必要がある。初期アイルランドでは、「司教」や「修道院長」の存在が必ずしも司教座教会と修道院の存在を示すわけではないからである。また、複数の修道院や教会同士の関係についても聖人伝等の史料からは「パルクア」論には当てはまらない多様な実態が浮かび上がってくる。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計12件）

- ① 梁川洋子「中世後期のウェールズ辺境領主ヨーク公リチャード」『関西大学西洋史論叢』、15（2012）、23-34頁. 査読無
- ② 田付秋子（翻訳）P.クルックス「『帝国のための実験室』の建設—キルクニー法からポインクス法に至るまで（1366-1496）の植民地アイルランド」『思想』11月号（2012）、岩波書店、9-43頁. 査読無
- ③ 常見信代「修道院パルクアの再検討—アイオナを中心に」*Haskins Society Journal Japan Supplement* 1（2011）、pp. 61-81. 査読無

④ 鶴島博和「母教会論序説-イングランドにおける初期教会史への基礎的視角:ラクルヴァー(Reculver)を事例として」*Ibid.*, pp.1-25. 査読無

⑤ 森下園「中世初期イースト・アングリア地方の司教座と教会組織」*Ibid.*, pp. 27-35. 査読無

⑥ Hiroko Yanagawa 'The Crown and Marcher Regality: the Bohun-Mortimer Dispute in the Late Thirteenth Century', *The Haskins Society Journal Japan*, vol.4(2011), pp.59-69. 査読有 発行年

⑦ 梁川裕子「ヴァイキング時代の北部ウェールズとアイリッシュ海文化圏」*Haskins Society Journal Japan*, Supplement 1(2011), pp. 59-71. 査読無

⑧ Sono Morishita, 'Religious Women in Medieval East Anglia - Not isolated, but marginalized', *Journal of Western Medieval History* (Ewha Womans University, Korea), No. 26 (2010), pp. 89-104. 査読有

⑨ 森下園「中世初期イングランドの司牧をめぐる考察-イースト・アングリアのケース」『上智短期大学紀要』30号（2010）、111-119頁. 査読無

⑩ 常見信代「ストラサアーン伯と‘ノルマン・セツルメント」『国学院経済学』第57巻第3・4合併号（2009）、39-82頁. 査読無

⑪ 梁川洋子「中世初期ウェールズの聖人崇敬と教会」『桃山歴史・地理』第44号(2009)、25-36頁. 査読無

〔学会発表〕（計4件）

① 鶴島博和「長い11世紀(c.973-1135)のイングランドにおける貨幣製造人の世界—ケント地方のミントを対象として—」日本西洋史学会第62大会(明治大学)、2012年5月.

② Hirokazu Tsurushima, 'Herrings and Powers in medieval England', 台南南榮技術学院, February 2012. (招待報告)

③ Hirokazu Tsurushima 'The Beginning of the empire in medieval Britain', The 20<sup>th</sup> anniversary meeting of Korean Society of British History, The University Chonju ,

June, 2011.(招待報告)

④ Sono Morishita, 'Religious Women in Medieval East Anglia—Not isolated, but marginalized', The 7th Korean-Japanese Symposium in Medieval History of Europe, May, 2010, Korea University, Seoul.

〔図書〕(計 10 件)

① Hirokazu Tsurushima(分担執筆), 'The moneyers of Kent in the long eleventh century', in David Roffe (ed.), *The English and Their Legacy 900-1200*, (Boydell, 2012), pp. 33-59.

② Hirokazu Tsurushima(分担執筆), 'Highest miles : some images of three knights : Turolde, Wadard & Vita', in Michael J. Lewis, Gale R. Owen and Dan Terkla(eds.), *The Bayeux Tapestry : New Approaches : Proceedings of a Conference at the British Museum*, (Oxbow Books, 2011), pp. 81-91.

③ 鶴島博和(分担執筆)「第 1 章 前近代のイギリス」木畑洋一・秋田茂(編著)『近代イギリスの歴史 16 世紀から現代まで』2011、ミネルヴァ書房、4-24 頁

④ Hirokazu Tsurushima(ed.), *Nations in Medieval Britain*, (Donington, 2010), 160pp.

⑤ 鶴島博和(分担執筆)「第 1 章 ローマン・ブリテン～10 世紀」近藤和彦編『イギリス史研究入門』山川出版社、2010、48-79 頁

⑥ 常見信代(監訳) T. チャールズ=エドワーズ(編)・常見信代(監訳)『オックスフォード・ブリテン諸島の歴史 第 2 巻 ポスト・ローマ』慶応義塾大学出版会、2010、378pp.+ 69pp.

⑦ 田付秋子(翻訳)「第 4 章 権威ある美術」T. チャールズ=エドワーズ(編)・常見信代(監訳)『オックスフォード・ブリテン諸島の歴史 第 2 巻 ポスト・ローマ』慶応義塾大学出版会、2010、183-240 頁

⑧ 田付秋子(翻訳)「第 6 章 テキストと社会」T. チャールズ=エドワーズ(編)・常見信代(監訳)『オックスフォード・ブリテン諸島の

歴史 第 2 巻 ポスト・ローマ』慶応義塾大学出版会、2010、281-325 頁

⑨ 森下園(翻訳)「第 4 章 文化表象の形」ラルフ・グリフィス(編)・北野かほる(監訳)『オックスフォード・ブリテン諸島の歴史 第 5 巻 14・15 世紀』慶応義塾大学出版会、2009、219-282 頁

⑩ 梁川洋子(翻訳)「第 6 章 王権と統治」ラルフ・グリフィス(編)・北野かほる(監訳)『オックスフォード・ブリテン諸島の歴史 第 5 巻 14・15 世紀』慶応義塾大学出版会、2009、343-398 頁

〔その他〕

ホームページ等

中世ブリテン史研究会

<http://britishhistory.kanadellibrary.org/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

常見 信代 (Tsunemi Nobuyo)

北海学園大学・人文学部・教授

研究者番号：30258694

(2) 研究分担者

鶴島 博和 (Tsurushima Hirokazu)

熊本大学・教育学部・教授

研究者番号：20188642

(3) 連携研究者

森下 園 (Morishita Sono)

上智大学・短期大学部・准教授

研究者番号：50320841

(4) 研究協力者

梁川 洋子 (Yanagawa Hiroko)

関西大学・非常勤講師

(5) 研究協力者

田付 秋子 (Tatsuki Akiko)

立教大学・非常勤講師